

外国語教育研究部

【令和元年5月現在】

主任 田中 久絵

部員 吉谷 瑞穂, 大野 雅子

目指す児童の姿

既得の知識や経験を基に言葉を選択し、他者に配慮しながらコミュニケーションを図り、互いの差異を擦り合わせて理解し合おうとする

外国語教育における納得解を導く姿を「既得の知識や経験を基に言葉を選択し、他者に配慮しながらコミュニケーションを図り、互いの差異を擦り合わせて理解し合おうとする」と設定し、研究に当たる。

I 目指す児童の姿について

1 具体として

「既得の知識や経験を基に言葉を選択し」とは、これまでの学習活動や生活経験で習得した発信語彙の中から、状況に合った語彙を選び出し、語彙を単体で用いるだけでなく、組み合わせたり言い換えたりして発信する方略的能力を駆使することである。例えば、産科医になりたいという夢を語る際、obstetrician という単語が分からなくても、既得の知識である baby と doctor を組み合わせ、baby doctor と言い換えて何とかして伝えようとする力を駆使することである。

「他者に配慮しながらコミュニケーションを図る」とは、これまでに獲得した資質・能力を活用し、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」ということを考えながら外国語によるコミュニケーションを図ることである。他者を尊重し、聞き手・読み手・話し手・書き手に配慮しながら発信・受信することにより、自他の認識を擦り合わせ、思いや考えを共有したり拡充したりするのである。

「互いの差異を擦り合わせて理解し合おうとする」とは、言語を用いることによって、他者との心地良い距離感を発見し、敬意と親しさを意識して相手の気持ちに寄り添った表現を模索しようとする態度である。言語を用いてコミュニケーションを図ることは、互いの正直な思いや考えを伝え合うことを可能にし、その背景にある文化に対する理解を深めることができる。母語や外国語を用いて互いの差異を擦り合わせることで、学びを深める対話につなげる。

2 設定の背景

「分かり合うための言語コミュニケーション」についての報告では、「コミュニケーション、特に言語コミュニケーション（言葉による伝え合い）によって、情報や考え、気持ちを互いにやり取りし、共通理解を深めていくことが欠かせない¹」とし、コミュニケーションにおいて意識すべき大切な要素として「正確さ」、「分かりやすさ」、「ふさわしさ」、「敬意と親しさ」の四点を示し、言葉によって分かり合うための方法を考える必要性を説いている。これを受けて、言語を直接の学習対象とする外国語教育についても同様のことが言えると考えた。

母語を使う者同士であっても、人は一人一人が異なった存在であるから、自分と相手との差異を意識し、互いにその違いを乗り越えて歩み寄ることから、分かり合うことにつながるコミュニケーションは始まる。報告において「歩み寄るとは、相手の聞く力や理解する力、すなわち知識や語彙の量、情報を処理する速さなどを推し量り、何を求めているのかを想像し、それらに沿うよう、相手に合わせた言い換えを行ったり、話す速度を調整したりすることである²」とし、「自ら

¹ 「分かり合うための言語コミュニケーション(報告)」文化庁文化審議会国語分科会, 2018, p6

² 同上, p6

が伝えたい情報、考え、気持ちをきちんと伝えるための準備こそが歩み寄ることである³と述べている。母語だけでなく、外国語においても、「歩み寄ること」によって他者への理解を深めることにつなげていく。

II 研究内容

本研究部では見通しをもつために思考・判断しながら問題解決に向かう過程を、納得解と定める。その過程で共有する視点として、具体的に以下の四点を挙げる。

- ①双方の思いや考え
- ②コミュニケーションの手順
- ③言語に関する気付きと、それを更新しようとする態度
- ④他の場面でも既習を生かしてコミュニケーションを図ろうとする見通し

本年次はこれら四点の視点を踏まえた授業づくりを行い、研究内容として、以下の二点に取り組む。

1 実生活に即した活動場面の設定

他者との心地良い距離感を発見し、敬意と親しさを意識して他者に配慮した表現を模索する児童を育成するために、実際の生活場面を基に活動を設定する。そうすることで、実感を伴ったコミュニケーションを実現することができるようになることを考える。実生活とかけ離れた活動からの転換を図り、外国語による深い学びに向かうために適した学習活動を創造する。

2 発達段階に即した語彙の選定とスケール化・図式化

単調なやり取りからの脱却を図り、互いの差異を擦り合わせて相手の気持ちに寄り添ったやり取りを意識してコミュニケーションを図ろうとする児童を育成するために、発達段階に応じた語彙が表す意味の度合いを細分化し、スケールで表したものを児童に提示する。そうすることにより、母語以外では表現しにくい細かく複雑な感情をアウトプットしやすくする。また、実際のコミュニケーションで使用する頻度が高いコロケーションを選定し、図式化して児童に提示する。そうすることにより、単語の羅列ではなくひとまとまりの表現として捉え、自然なイントネーションを意識して話すことができるようになることを考える。

これらを組み合わせて実践することにより、習得した外国語をどのように用いていくかを深く考えながら納得解を導き、言語を用いることによって他者と理解し合おうとする児童を育成することができることを考える。

III 研究・検証方法について

検証方法として以下の二点を取り上げ、研究内容を検証する。

- 1 語彙の選定と活動場面の設定の適否について、児童による自己評価カードの記述を基に分析する。
- 2 授業を記録した映像から書き起こしたプロトコルを基に、語彙をスケール化・図式化したことによる児童の発話量や内容を分析する。

【参考文献】

- 文化庁文化審議会国語分科会「分かり合うための言語コミュニケーション(報告)」文化庁, 2018
田村学『深い学び』東洋館出版社, 2018
鳥飼玖美子他『「グローバル人材育成」の英語教育を問う』ひつじ書房, 2016
大山万容『言語への目覚め活動 複言語主義に基づく教授法』くろしお出版, 2016

³ 「分かり合うための言語コミュニケーション(報告)」文化庁文化審議会国語分科会, 2018, p6